

おぶねもり  
小船森遺跡

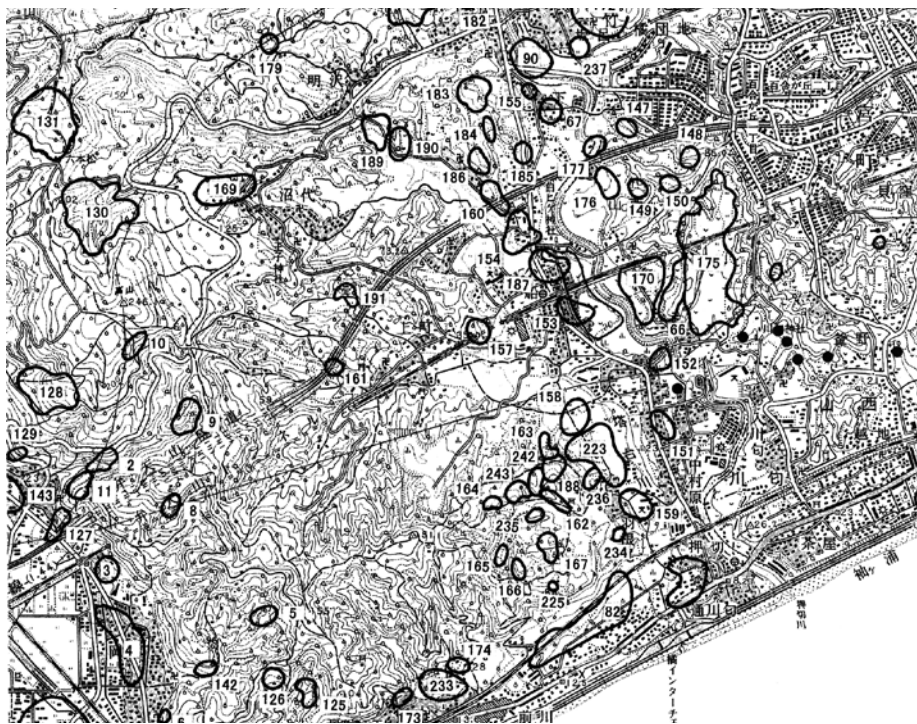
—中村川流域に広がる遺跡—



小田原市教育委員会

# 例 言

- 1 本書は、散策しながら遺跡が学べるガイドブック「小田原の遺跡探訪シリーズ」として作成しました。今号は、令和3年（2021）に小田原市・橘町合併50周年を迎えたことを記念し、第17号として市内小船で区画整理事業に伴って発掘調査を実施した際に発見された小船森遺跡周辺に広がる遺跡を紹介しています。
- 2 本書の刊行は、令和3年度国庫補助事業である「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」の一環として行いました。
- 3 本書の作成に関しては、以下の諸氏・諸機関からご指導・ご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。  
(敬称略・順不同) 小池 聡、白政晶子、株式会社 盤古堂、小田原市立中央図書館
- 4 本書の作成は、小田原市文化財課文化財課三戸芽が担当者となり、同課佐々木健策・土屋健作・土屋了介・早野路子・野尻夏姫の協力を得ました。写真の撮影・編集は、市毛秀人の協力を得ました。散策マップの作成にあたり、萩原清香の協力を得ました。
- 5 本書では、旧橘町周辺に広がる遺跡を中村川流域に広がる遺跡として紹介します。



第1図 遺跡周辺位置図 (1/30,000)

[表紙] 小船森遺跡の埋蔵銭出土状況 (南から)

[裏表紙] 小船森遺跡出土 弥生時代後期壺

# I 大地の隆起で「<sup>わん</sup>湾」から「<sup>かた</sup>潟」へ

## 1 中村川流域に形成された内湾

小田原市の東部と二宮町との市町境には、大磯丘陵が位置します。大磯丘陵南西縁には、「中村原面」と呼ばれる標高20～28mの完新世の海成段丘が発達し、中村川（河口付近では<sup>おしきり</sup>押切川）が流れています。本書で扱う中村川流域一帯は、地震による隆起により相模湾沿岸では最も早く離水し、段丘化した場所です。これは、古中村湾に形成された<sup>しもはら</sup>下原層という縄文海進最盛期直前の土層に含まれる貝化石群の変遷から明らかになっています。まず、古中村湾の変遷を見ていきましょう（第2図）。

古中村湾は、約9,000～7,500年前の形成期には湾口の細長い、遠浅で干潟の広がる入江だったと考えられています。約7,500～6,500年前の古中村湾の拡大発展期には湾口の幅はそれほど変わりませんが、内湾は拡大し、現在の海岸線から約2.5km奥まった小田原－厚木道路付近まで海が入っていました。周辺で確認されている貝類化石群の検討によると、急激な海面上昇に伴って古中村湾は形成期よりも水深が深くなり、湾口部は沿岸流による砂の堆積で浅くなり湾内への外洋水の流入は弱まりました。し



写真1 相模湾と中村川流域の地形



「湾」形成期  
(9,000~7,500年前)



拡大発展期  
(7,500~6,500年前)



「潟」形成期  
(5,500年前)

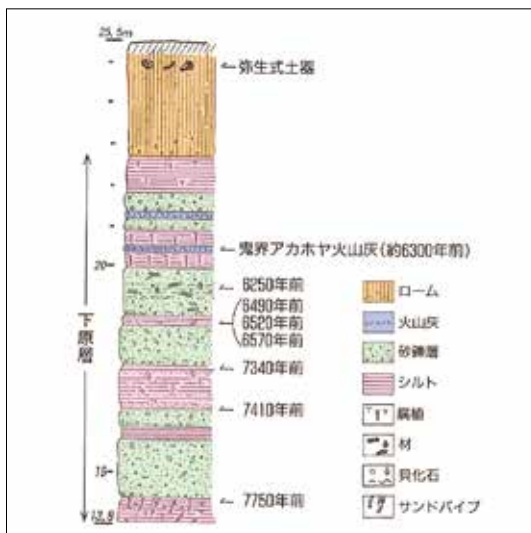
第2図 古中村湾から古中村潟  
への変遷 (松島2006を改変)

かし、約6,500年前に大磯丘陵で発生した巨大地震に伴う大地の隆起によって、古中村湾は消滅しました。そして、鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah) の降灰した約6,300年前には「古中村潟」へと姿を変えていました。

縄文時代前期の羽根尾貝塚がつくられたのはこの時期で、木製品や骨角製品などの有機質の遺物が良好な状態で発見され、出土品458点が神奈川県的重要文化財に指定されています。

羽根尾貝塚については、遺跡探訪シリーズ1『羽根尾遺跡群 一羽根尾貝塚・羽根尾横穴墓群と周辺遺跡一』で紹介していますので、詳しくはそちらをご参照ください。

このような「湾」から「潟」への変化は、かつて小船地区で見られた露頭で観察することができましたが、現在は造成工事で削平され、見ることはできません (第3図)。



第3図 小船の地質柱状図 (松島2006に着色)

## 2 発掘された中村川流域の遺跡

中村川流域は、市内でも遺跡が多く分布する地域の一つで、丘陵部には古墳時代の横穴墓が分布するという特徴があります。時代ごとに遺跡を見ていくと、縄文時代は前述した羽根尾貝塚（No.223遺跡）のほか、前期の遺物包含層を検出した道場城山遺跡（No.66遺跡）、晩期の土器群が出土する前川山王前遺跡（No.82遺跡）があります。

弥生時代及び古墳時代は、羽根尾横穴墓群（No.162～167・188・234～236・242・243遺跡）や現在の橋中学校周辺で集落跡が発見された羽根尾堰ノ上遺跡（No.159遺跡）などの遺跡が河川流域の段丘面を中心に分布します。海浜部の独立丘陵上には前川右近屋敷遺跡（No.82遺跡）や前川向原遺跡（No.267遺跡）があり、縄文時代晩期から弥生時代前期の土器群が出土しています。

奈良・平安時代では、調査内容に課題があり注意が必要な遺跡ですが、道場城山遺跡・殿窪遺跡（No.175遺跡）で8～9世紀の竪穴住居跡が見つっています。また、前川向原遺跡で9世紀末から10世紀の竪穴住居跡を検出しています。

中世の遺跡では、小船森遺跡（No.153遺跡）で重要な発見がありました。小船森遺跡の周辺は、源頼朝の家臣で頼朝挙兵の主力として活躍した中村氏と関連深い地域として伝承のある土地で、12世紀後半から15世紀中頃までの遺構が展開しています。

近世には、1707年の富士山噴火により甚大な被害を受けたとされ、小舟村（小船村）の被害状況を記した文献資料が残っており、畑地としての土地利用と当時の人々の苦労が偲べれます（写真2）。



写真2 『開発馬飼料麦種買代三色金割付連判帳（小田原市立中央図書館蔵）』に記された宝永年間の富士山噴火による小舟（小船）村の被災状況

## II おぶねもり 小船森遺跡

### 1 地中から見つかった4,838枚の埋蔵銭

平成7年（1995）から小船森地区で土地区画整理事業に伴う発掘調査が行われました（写真3）。調査はA地区とB地区に分けて合計9,192㎡に及ぶ広大な範囲が発掘され、弥生時代から平安時代までの土器群の良質な資料が得られました（第5・6図）。

また、特に注目すべき発見として、中世の土坑の中から総枚数4,838枚に及ぶ銭の出土があげられます（写真4・6）。この土坑は直径約48cmで、銭の底には直径約27cm、厚さ約1cmの円形の板まげものが敷かれており、曲物に入れられて地中に埋められたと考えられています。

銭は「緡まし」と呼ばれる状態で出土しており、62種類の銭で構成されています。埋蔵銭が地中に埋められた理由については、経済活動や財産の保全のために当時の人が備



写真3 小船森遺跡の発掘調査の様子（西から）

蓄した、あるいは呪術的な意味を求めて埋納したなど諸説あります。市内でもこの小船森遺跡ほどまとまった埋蔵銭の出土事例はなく、珍しい例として注目されます。

出土した銭の最古銭は、「開元通寶（唐：621年初鑄）」で最新銭は「宣徳通寶（明：1433年初鑄）」でした。最多銭は「永樂通寶（明：1408年初鑄）」で、653枚と全体の13%を占めていました。「一緡」の単位は、西日本と東日本で異なります。こ

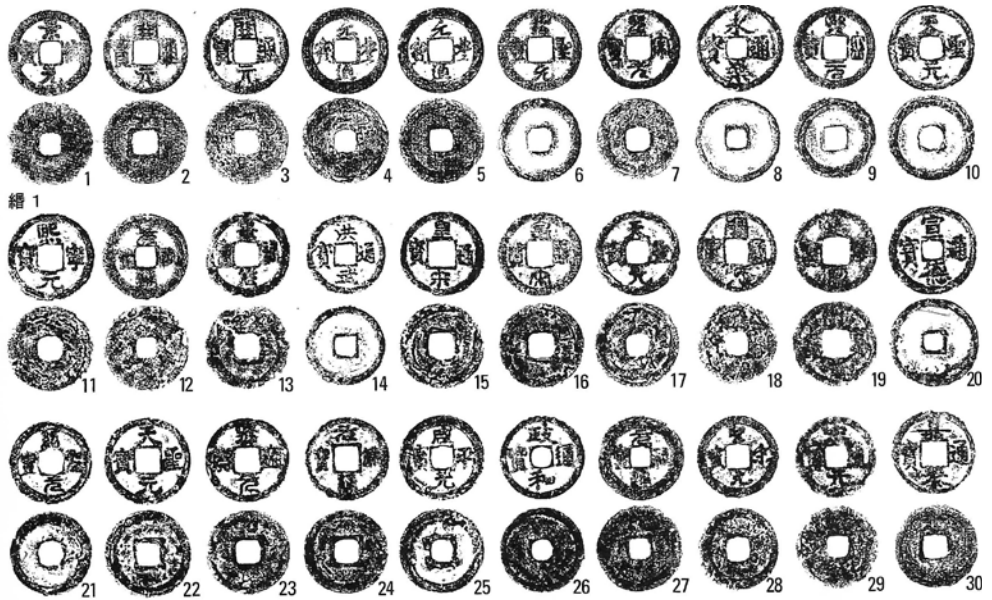


写真4 出土した銭



写真5 埋蔵銭の出土状況を取材する様子



写真6 65号土坑の埋蔵銭出土状況（南東から）

ここでは銭97枚で百文とする<sup>せいひやくほう</sup>省陌法（百文未滿の銭を束ねて、百文として通用させる慣行）によると考えられ、五貫文（5,000文）の銭が曲物に入れられて収められていたと推測されます。

小船森遺跡のB地区は、段丘面の広範囲に井戸跡や溝状遺構などが構築され、中世でも古い年代の陶磁器やかわらけが出土しています。中村荘を本拠地とした源頼朝の家臣である中村氏の居館跡想定地が近隣にあることから、中村氏に関連する遺構である可能性があります。中世後半になると埋蔵銭が埋められる状況となりました。

## 2 墓域から集落へ

小船森遺跡では、調査区が一番南側で古墳時代の円墳の周溝<sup>しゅうこう</sup>がみつかりました。規模は、内径が14m前後、外径は20m前後で、遺構の大半が削平されており、周溝が深



写真7 1号古墳航空写真（東から）





写真8 1号古墳出土 白玉



写真9 1号古墳出土 勾玉



写真10 遺構外出土 馬具か

さ30cm前後残っているだけの状況でした。この周溝からは96点の滑石製白玉<sup>かつせきせいすだま</sup>（写真8）と滑石製勾玉<sup>まがたま</sup>1点（写真9）が出土しており、5世紀代の赤彩の施された土師器丸碗とともに見つかっていることから、副葬品として納められていた可能性があります。

隣接する小船永福遺跡第I地点でも古墳が見つかっており、5世紀代に中村川の低位段丘面に古墳群が形成され、6世紀代に入り削平等を受けて集落域へ転換していったと考えられます。

また、古墳時代前期の土器廃棄場（2号特殊遺構）からは88点の土器が出土しています。この遺構は、自然地形である窪みを利用した、長径3.4m、短径2.0～17.3mの大型の落ち込みです。ここでは、特にお供えものなどに使用されたと考えられる高坏や器台<sup>たかつき きだい</sup>が多く出土しています（写真11）。

なぜ器台が多く捨てられたのかは、この遺構の性格や立地と関係すると考えられますが、周辺の調査事例が少なく、はっきりとした答えは導き出せていません。



写真11 古墳時代前期の土器廃棄場出土資料

### 3 弥生時代の「絵画土器」

小船森遺跡から出土した土器片には、角のある鹿と矢を射る人物が線刻されたものがあります（写真12）。弥生時代の青銅器（銅鐸など）、木器、土器にはしばしば動物や人物などの図像表現である「絵画」が描かれます。

銅鐸や土器に描かれる図像は、鹿・人物・高床式建物・魚・鳥・カエル・ヘビ・アメンボ・イモリなど弥生人の生活世界において身近に存在したものがモチーフとなっています。描かれる図像の組み合わせや位置関係には規則性があります。例えば、アメンボや魚などの水・水田と関連する生物群は鹿やイノシシと組み合わせることはありません。また描かれるモチーフ間の関係は、並列関係・捕食関係・衝突関係の三つに整理できます。これらの図像の構造分析から人間と自然の対立関係、弥生人が水田によって自然の超克を志向する世界観を持っていたとの指摘もあります。

小船森遺跡で出土した土器に描かれた図像は鹿と人物です。鹿は、弓を持った人間（男）に射かけられていたり、手で押さえつけられていたり、人間（男）に打ち負かされる存在として描かれます。鹿の角は毎年生え変わり収穫の季節である秋には抜け落ちることから、水田稲作との結びつき、再生のシンボルとして土器に描かれたと考えられています。

絵画土器は、弥生時代中期後葉に近畿地方で盛行します。最初に絵画土器が注目されたのは、奈良県田原本町の唐子・鍵遺跡からこ かがし みずで見つかった鹿の絵でした。奈良県の清水風遺跡かぜでは複数の矢を射かけられる鹿が描かれています。また複数の鹿を背後から弓を持った人物が追いかける意匠が石川県の八日市地方遺跡では描かれています。



写真12 弥生時代の土器片に描かれた鹿

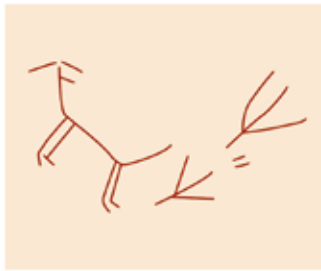
こうしたことから、稲作の技術や道具が西日本からもたらされたと共に、絵画土器に象徴されるような世界観や身の回りのモノ・コトの認識の仕方も次第に広がっていったと考えられます。

弥生土器の絵画については、「土器に描いた」という事実が重要であり、出来上がった土器を鑑賞する意思はなかったとの指摘もあります。

小船森遺跡で出土した絵画土器の線刻は、注意深く見ないと見落としかねない浅い線で描かれています。小船森遺跡で生活した弥生時代の人びとはどのような思いをこの鹿と人物に託したのでしょうか。



三沢ハサコの宮遺跡（福岡県）



新迫南遺跡（広島県）



八日市地方遺跡（石川県）



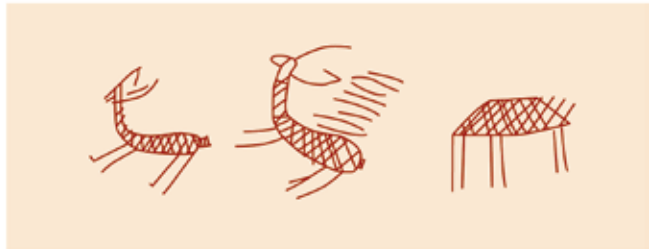
天神ノ元遺跡（佐賀県）



上箕田遺跡（三重県）

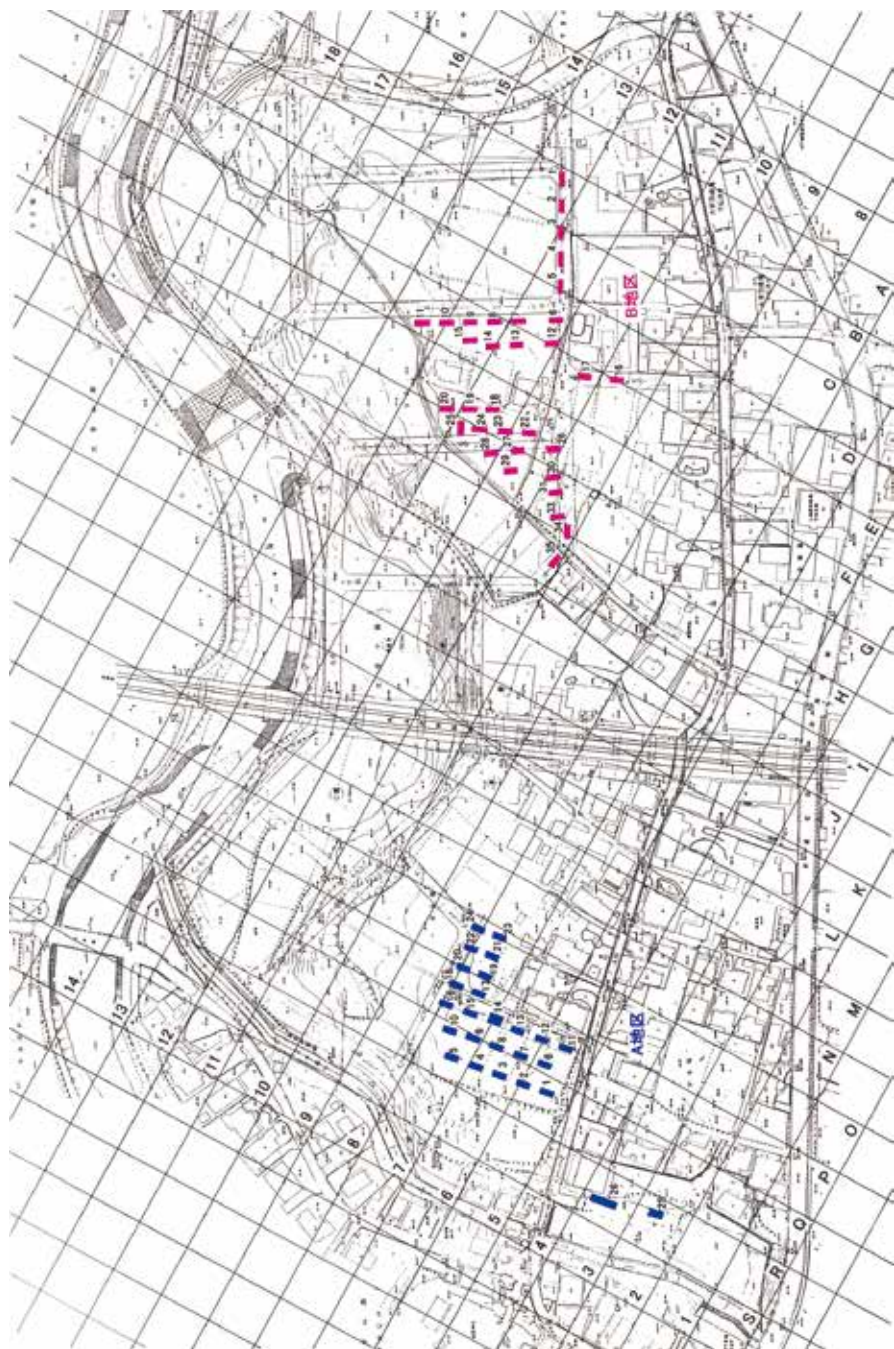


唐子・鍵遺跡（奈良県）

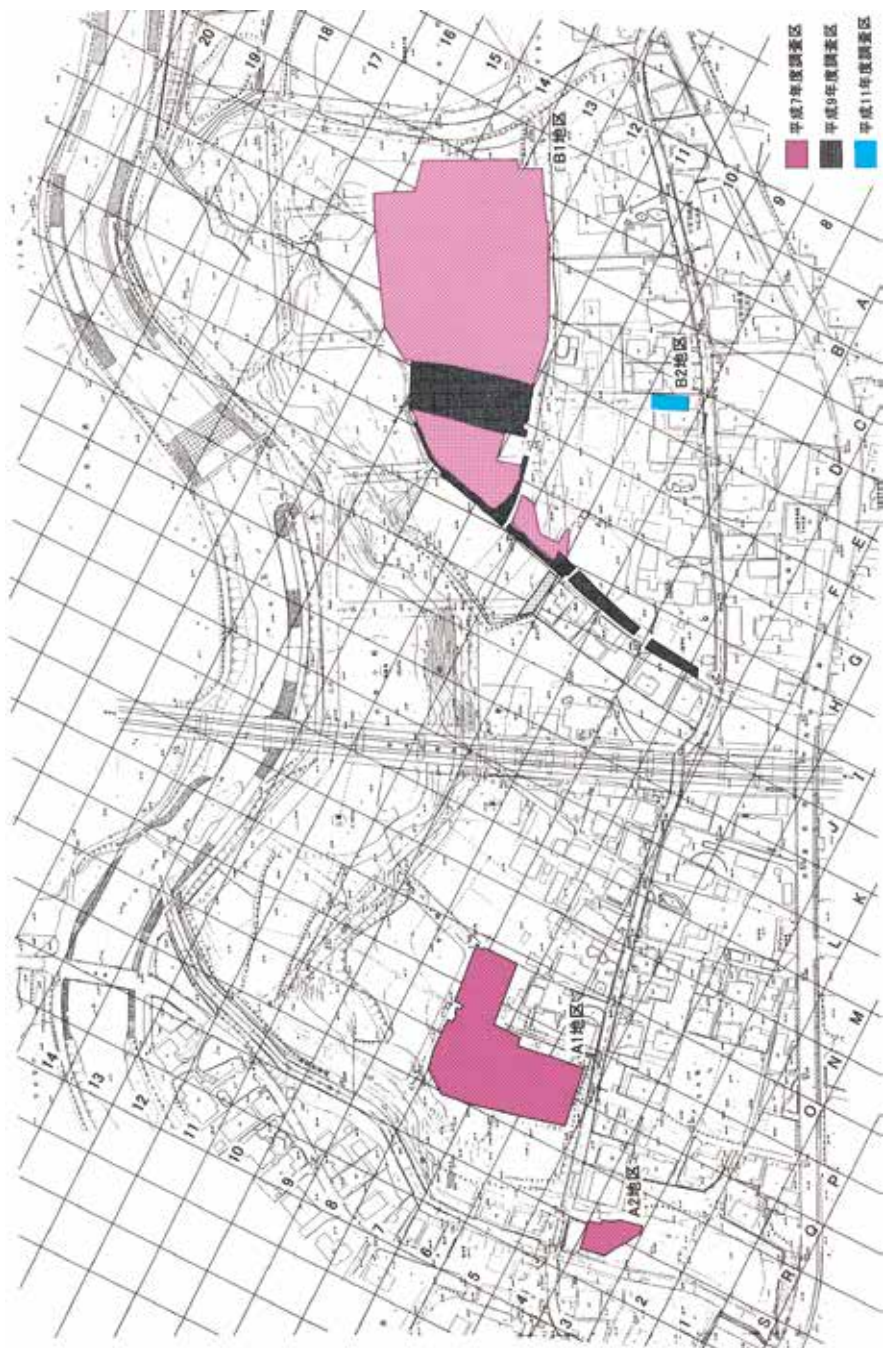


清水風遺跡（奈良県）

第4図 鹿が描かれた各地の土器（神奈川県教育委員会2012『平成23年度かながわの遺跡展・巡回展 弥生時代のかながわ 一移住者たちのムラと社会の変化一』を改変）



第5図 小船森遺跡試掘調査位置図



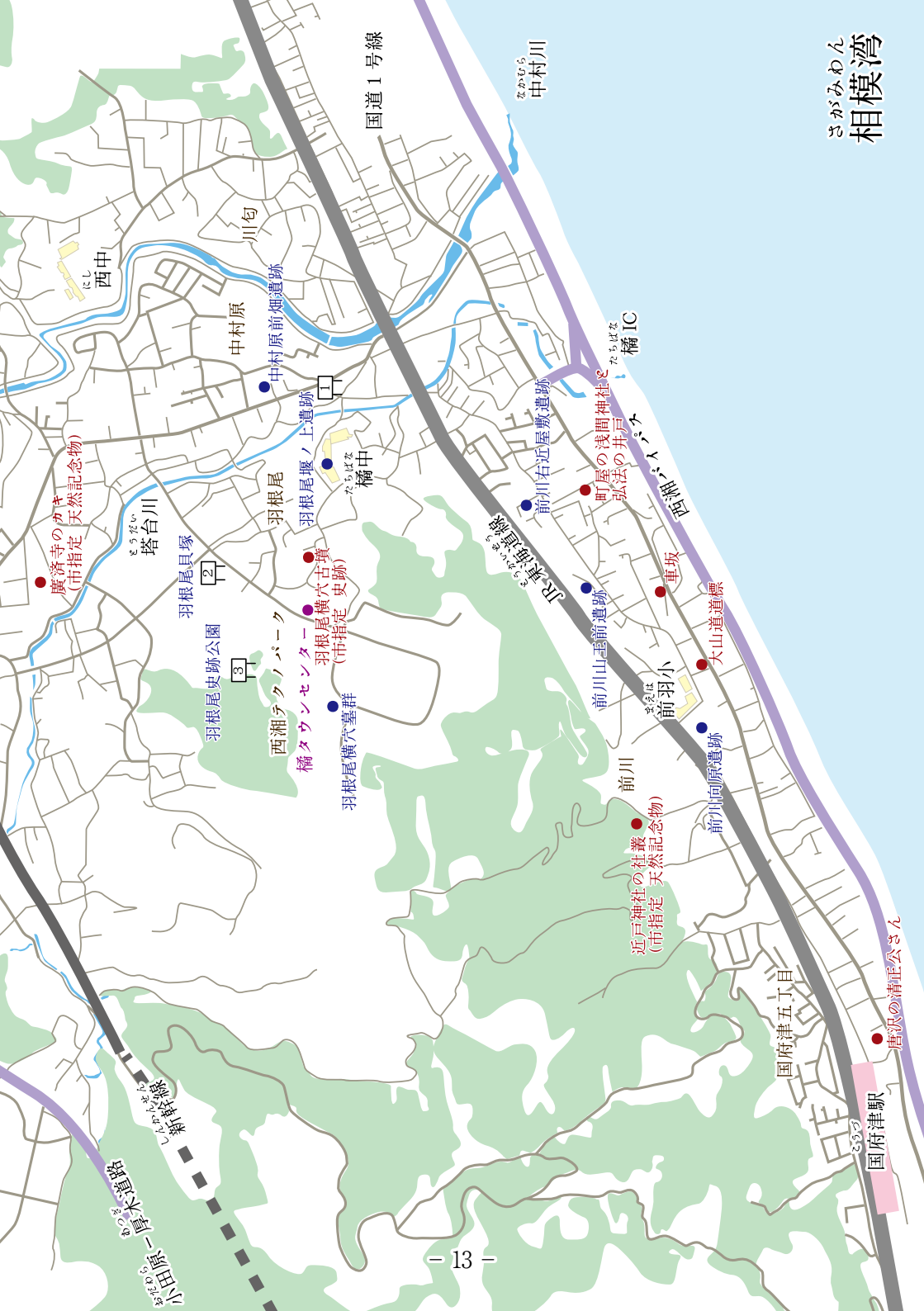
第6図 小船森遺跡本格調査範囲図

# 小船森遺跡とその周辺 散策マップ

- 1 中村原周辺の遺跡
- 2 羽根尾貝塚
- 3 羽根尾横穴墓群
- 4 小船森遺跡



さがみわん  
相模湾



唐沢の清正公さん

国府津駅

国府津五丁目

近戸神社の社叢  
(市指定 天然記念物)

前川向原遺跡

前羽小

前川山崎前遺跡

車坂

町屋の浅間神社と  
弘法の井戸

前川右近屋敷遺跡

橋IC

国道1号線

中村川

中村原

西中

塔台川

羽根尾具塚

羽根尾史跡公園

西湘テックノパーク

羽根尾横穴古墳  
(市指定 史跡)

羽根尾横穴墓群

廣濟寺のかき  
(市指定 天然記念物)

にし

川匂

中村原前畑遺跡

羽根尾堰ノ上遺跡

橋中

JR東海東線

西湘バイパス

大山道標

国府津五丁目

国府津駅

### Ⅲ 中村川下流域に形成された墓と集落

#### 1 古墳時代の墓域と集落跡—おぶねえいふく小船永福遺跡第Ⅰ地点

小船永福遺跡第Ⅰ地点は、小船森遺跡A地区の西側に位置します。調査では、調査範囲全体で近世以降の耕作による畝状の落ち込みが見られ、畑地として利用されていたことがわかりました。中世では13世紀末から14世紀前半の柱穴群が、見つかっています。また、平安時代の集落の周辺域に構築される円形土坑が見つかっていることから、本地点の西側などに集落が広がる可能性が考えられます。

この地点では、特に弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡と方形周溝墓、古墳時代中期の古墳の存在が注目されます（写真13）。検出された方形周溝墓は、一辺が約12m程度で、周溝の幅は約1.6~1.8mでした。周溝の覆土からは古墳時代前期の壺・甕・高坏などが出土しており（写真14）、特に口縁部がS字状に屈曲して開く東海系のS字状口縁甕の出土が注目されます。

検出された古墳（1号古墳）は、周溝の外径で約20mの規模を有しており、周溝の断面形は緩やかに開く逆台形をしています。周溝の幅は約1.8mで、調査区の南側へ続いています。この周溝の覆土からは古墳時代中期前半の土師器片や須恵器の甕片などが出土しています。小船森遺跡B地区でも同時期の古墳が見つかっており、周辺に古墳群を形成する可能性があります。



写真13 古墳と方形周溝墓（東から）





写真14 1号方形周溝墓から出土した  
土器（南西から）



写真15 古墳時代中期の竪穴住居跡（南から）



写真16 古墳時代中期の3号竪穴住居跡  
（南から）



写真17 古墳時代中期の貯蔵穴から出土した  
土器（北西から）

隣接する小船森遺跡A地区では古墳時代前期の住居跡が見つかっていましたが、ここでは古墳時代前期の竪穴住居跡2軒と古墳時代中期の竪穴住居跡6軒を確認しました（写真15）。調査区の北西で確認した3号竪穴住居跡は貼床を持つ住居で、貯蔵穴を伴っていました（写真16）。

神奈川県西部では、古墳時代前期末から後期初頭（5世紀～6世紀前半）まで遺跡数が激減し、考古資料が非常に希薄な時期を迎えます。その要因として、大規模な地震の影響や集落の立地する場所が台地上から低地へ移動したことなどが考えられています。

## 2 前羽小学校周辺の遺跡 まえがわむかいばら 前川向原遺跡第Ⅰ地点・まえがわさんのうまえ 前川山王前遺跡第Ⅱ地点一

前羽小学校の西側に位置する前川向原遺跡第Ⅰ地点は、標高約16mの砂丘上に形成されています。この砂丘上に遺跡が立地するため、地山は砂層です。調査では、古墳時代前期の方形周溝墓と奈良・平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡を検出しました。



写真18 前川向原遺跡第I地点第1区の溝と土坑（南西から）



写真19 前川向原遺跡第I地点第2区の古墳時代前期の方形周溝墓と竪穴住居跡（北東から）



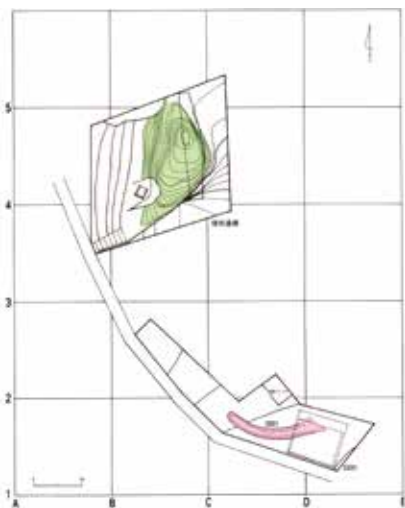
写真20 竪穴住居のカマド煙道と甕（南東から）



写真21 重なり合う住居（南から）

検出された古墳時代の方形周溝墓の一边の長さは7m以上で、主体部は削平されていました。前川向原遺跡第I地点の東側では、標高約26～29mの一段高い段丘面上で古墳時代前期の竪穴住居跡などが検出されており、ここで見つかった方形周溝墓はそれらの集落の墓域である可能性が考えられます。

奈良・平安時代になると、わずかに竪穴住居跡と掘立柱建物跡、柵列などが見つかった程度で、小規模な集落が展開していたと考えられます（写真20・21）。



第8図 前川山王前遺跡第I地点 遺構配置図

前川山王前遺跡第Ⅱ地点では、<sup>ほころ</sup>祠を祀った比高差2m程の塚状の高まりが存在し、古墳の可能性が想定されることから発掘調査が行われました（第8図）。調査の結果、塚状の高まりは人工的な盛土構築の可能性は低いことがわかりましたが、縄文時代晚期から弥生時代前期の遺物包含層が検出され、曾我丘陵南東端部の暮らしの痕跡が明らかになりました。

### 3 弥生人の祈り —<sup>はねおせきのうえ</sup>羽根尾堰ノ上遺跡—

現在の橘中学校の敷地内にも遺跡があります。ここには、羽根尾堰ノ上遺跡と呼ばれる遺跡があり、昭和58年（1983）8月1日から11月30日まで発掘調査が行われました。弥生時代中期の宮ノ台式期の土器が大量に出土しており、鳥形土器（写真24）や大型の壺（第9図）などを伴うことから、ムラの有力者または特別な位置にあった世帯の住居があったと考えられています。この鳥形土器は鳥の羽根の模様のような表現が赤彩されています。土器を鳥の形にしているものは全国的にも希少で注目されます。

本書の第Ⅱ章で紹介した弥生時代の「絵画」と同様に、弥生時代の人々の精神世界や水田稲作への思いを探る資料として大変貴重なものといえるでしょう。



写真24 羽根尾堰ノ上遺跡出土鳥形土器



写真22 羽根尾堰ノ上遺跡の住居跡



写真23 住居から出土した土器



第9図 宮ノ台式期の壺

#### 4 県内屈指の横穴墓密集地

羽根尾横穴墓群は、6世紀後半から造営が始まり、8世紀初頭まで使用されていました。

横穴墓とは、古墳時代後期を中心に造られた墓で、丘陵の斜面や崖を利用して洞穴のように掘りこんだ埋葬施設です。限られた範囲にまとまって構築される傾向があります。横穴墓は当時の有力者の家族墓であると考えられており、追葬が行われる例もあります。神奈川県内では、小田原市東端部から大磯町・平塚市西端部にかけて広がる大磯丘陵に1,200基近い横穴墓が分布し、屈指の横穴墓密集地として知られています。

近年では横穴墓と古墳の分布の比較から、古墳から墓制を変換して横穴墓を採用したのではなく、横穴墓を本来の墓制とする集団が、古墳の分布とは異なる地域に定着した可能性が指摘されています。



写真25 谷津横穴墓群



写真26 板取横穴墓群



写真27 穴口横穴墓群



写真28 横穴墓内部の様子



写真29 横穴墓内部の棺座



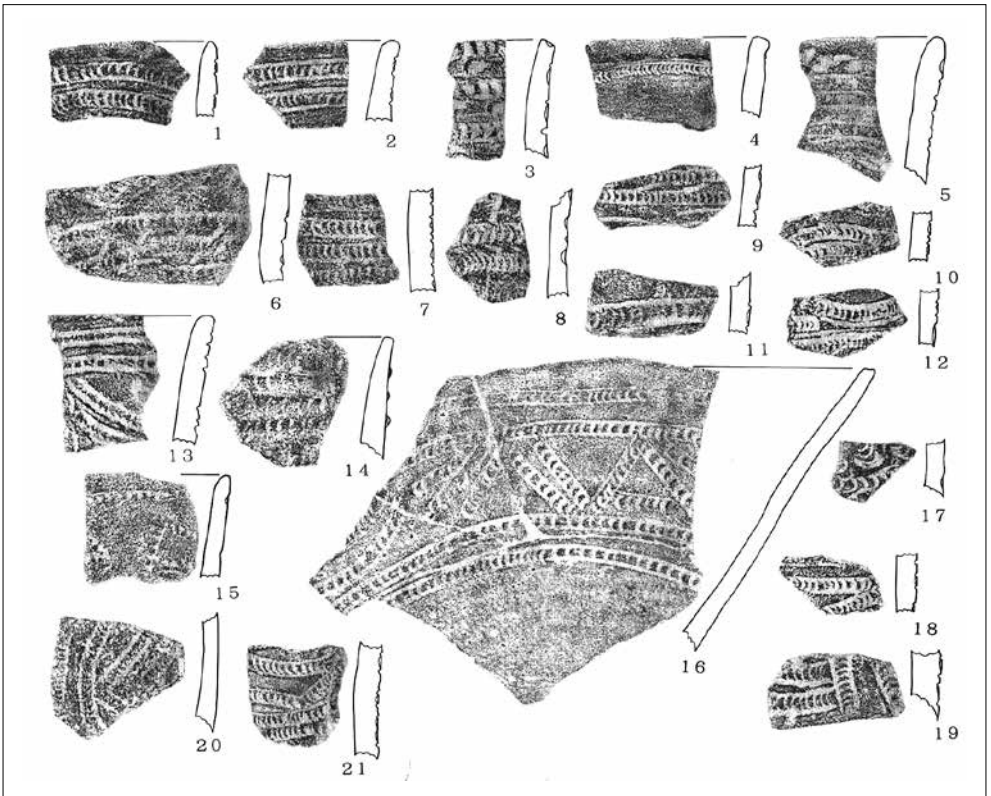
写真30 谷津横穴墓群出土遺物

5 学史に残る遺跡 — 殿窪遺跡と道場城山遺跡 —

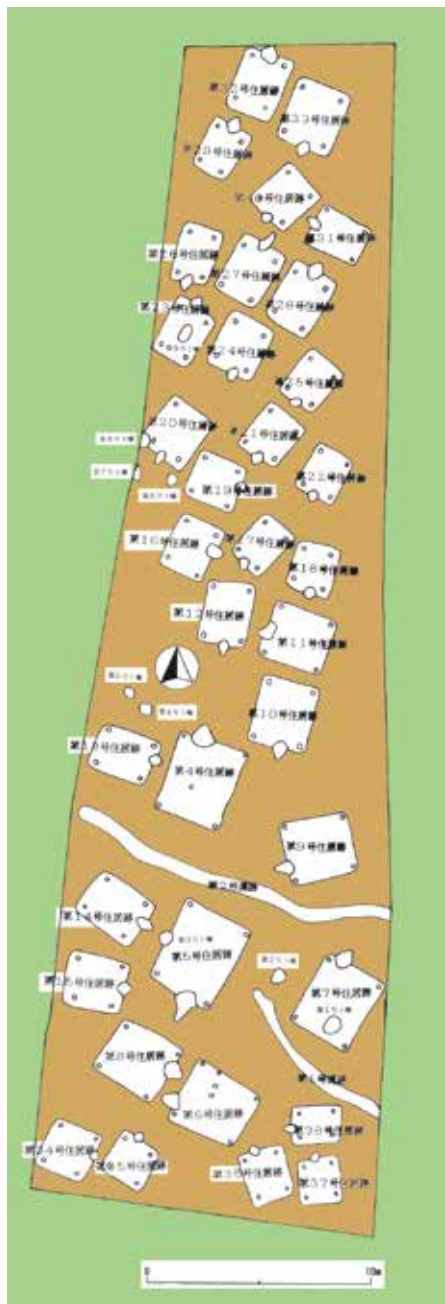
殿窪遺跡と道場城山遺跡は、二宮町に隣接する小田原市山西に位置します。殿窪遺跡は、大正4年（1915）に木槽の一部（川勾神社に保管）が発見されたことから、日本考古学の礎を築いた石野瑛や大場磐雄に注目された、学史上重要な遺跡の一つです。

道場城山遺跡は、「城山」と呼ばれる長径60m、短径24m程の丘陵に位置します。『新編相模國風土記稿』の前川村の条に「城山、東方にあり、淘綾川勾村に跨れり、城蹟なるべけれど、今其伝を失ふ」と記されることから、中世の城館が存在したと考えられてきました。

昭和62年（1987）から平成元年（1989）に行われた発掘調査は、調査内容に課題があり検証が必要ですが、縄文時代前期の遺物包含層と古墳時代前期の木製品集中、古墳時代後期から奈良・平安時代の住居跡、中世の堀を検出しました。



第10図 縄文時代前期の土器



第11図 古墳時代後期以降の住居

縄文時代前期は、本書第I章で紹介したように、古中村湯の西岸に羽根尾貝塚が形成され、相模湾と周辺の花々の恵みを楽しみながら他地域の人々と活発な交流を図っていた時代です。小田原市内では、縄文時代前期の遺跡の分布は、酒匂川以東では中村川流域に集中します。

道場城山遺跡では、縄文時代の遺構は検出されませんでした。縄文時代前期後半の諸磯b式期の土器片が多量に出土しています(第10図)。

丘陵の間に形成された谷に立地する殿窪遺跡(写真31)から古墳時代前期の梯子や田下駄、建築部材などの木製品が多数出土しました(写真33)。建築部材には、工具によって加工された痕跡が残されており、木材を組み合わせて水を流すための排水設備を構築した可能性などが指摘されていますが、明確な遺構を伴っていないため、今後の調査・研究が期待されます。

古墳時代後期から奈良・平安時代では、標高25~27mの舌状台地の裾野で35軒の住居跡を検出しています(写真32)。



写真31 殿窪遺跡(西から)

古墳時代後期の6世紀の終わり頃から東国では国造制という制度を通して、ヤマト王権によって支配が行われます。これは、在地の有力豪族を地方官（国造）に任命することで間接的にヤマト王権が地方を支配しようとした制度です。足柄平野から大磯丘陵・秦野盆地にかけての地域は、師長国造の支配領域に比定することができます。



写真32 住居跡の検出状況（北から）

国造に該当するような有力者の拠点を探る手掛かりとなるのが、古墳や横穴墓、集落の分布です。中村川下流域は羽根尾横穴墓群をはじめとして、県内屈指の横穴墓密集地として知られています。



写真33 出土した木製品

中村川左岸では発掘調査事例が限定的なことを考慮する必要がありますが、道場城山遺跡・殿窪遺跡に営まれた集落に暮らした人々と横穴墓には密接な関係があった可能性があります。

中世になると「中村荘」を本拠地とした中村氏一族が、土肥・土屋・二宮などに分かれ、西相模一帯に勢力を拡大しました。『吾妻鏡』には文治元年（1184）10月29日の夜、源頼朝が中村氏の館に宿泊し、相模国の御家人が悉く参集したと記されていますが、その居館はどこにあったのでしょうか。市内小竹には中村氏居館跡の想定地があり、五輪塔が祀られ地域の人々に大切にされています。



写真34 中世武士中村氏に関連する堀か？

道場城山遺跡の調査では、中村川左岸の最南端の尾根に56本の調査区を設定し、2条の堀を確認しています。堀の法面の角度は約38度、深さは2.6mで、堀幅は5.2～8mと4.7～4.9mで、丘陵をほぼ東西方向に横断します。部分的な調査でしたが、中村氏ゆかりの堀の可能性があり、この地に居館があったのかもしれない。

# IV 宝永火山灰の降灰

## 1 文献資料に残る富士山噴火の影響

江戸時代になると、度重なる地震や火山噴火が発生し、住民は被害に苦しめられました。宝永4年（1707）11月に発生した富士山噴火は大きな被害をもたらしました。当時の状況を詳細に記した文書が小船村に残されています（写真2・35）。

これは、足柄下郡小船村の名主が記したもので、被災後に小船村に支給された開発金・馬飼料・麦種の購入資金を村人に分配した帳簿です。余白には砂降りの様子が書き込まれ、曾我丘陵東側一帯の被災状況を伝えています。

小船村の記録では、鮮明に当時の状況が記されています。11月22日夜に小さな地震

が数回あり、翌23日の午前10時頃から雷のような音が鳴り響き、黒石混じりの軽石が降ってきました。夜の8時過ぎから火山灰が降り始めました。火山灰は翌日も降り続き、昼間であるにもかかわらず砂煙で闇夜のようにになり一日中灯りを用いていたようです。25・26日になっても爆発音は続き、火山灰が静かに降り続けました。27日にも降灰は続き、噴火の音と地震がたびたび起きました。29日以降、火山灰はようやく少なくなり音も静かになりましたが、その後も12月8日ごろまでは火山灰が降り続けました。

当時、稲はすでに収穫済みの季節でしたが、田畑には麦が作付けされていました。田畑や野山は一面の砂場となり、村々は途方に暮れる状況に追い込まれてしまいました。

降り積もった火山灰の深さは、小船村では4寸から5寸（12～15cm）で、麦は全滅しており、甚大な被害となりました。この記録には、砂降り後の農作物の生育状況も記録されており、耕



写真35 詳細に記された火山灰の様子  
『開発馬飼料麦種買代三色金割付連判帳（小田原市立中央図書館蔵）』



作環境の変化に試行錯誤する農民の様子がうかがえます。

## 2 発掘された江戸時代の耕作の痕跡

宝永噴火については、これまで火山学・文献史学から多くの研究がなされてきました。近年、河村城跡（足柄上郡山北町）や新東名高速道路の建設に伴う発掘調査が行われた横野山王原遺跡（秦野市）などで「天地返し遺構」と呼ばれる遺構が見つかり、注目されています。これは、田畑に降り積もった砂を掘り埋めて復旧した痕跡です。横野山王原遺跡では、広大な範囲で天地返し遺構が見つかり、地割ごとに様々な形態の溝が掘られていました。

発掘調査の際には宝永火山灰は年代を判別する鍵層の一つとなっています（写真36）。黒い細かい粒子の中に、極小の赤い粒が点在するという特徴を持ちます（写真36の丸の中）。

小船森遺跡や中村川下流域の遺跡では、近世の遺構として畑の耕作に伴う耕作痕などが見つかっています（写真37）。このような畑の耕作痕は、発掘調査の際にはつい看過されてしまいがちです。しかし、小船村に残された文献資料を見ていくと、この地に暮らした人々が試行錯誤しながら未曾有の被害を乗り越えようとした姿が見えてきます。

現代に生きる私たちも、先人たちに学びながら日々を過ごしていく必要があるのかもしれない。



写真36 宝永火山灰サンプル



写真37 小船永福遺跡第Ⅰ地点の近世耕作跡（南から）

時代・年代 (calBP)		時期区分	指標となる主な土器型式	主なできごと	本書に登場するできごと	
旧石器時代	約5万年前	後期		箱根火山の爆発的噴火		
	1万6000年前	草創期	隆起線文系 爪形文系/円孔文系 多縄文系	細石刃が日本列島全体に広がる		
	1万1500年前	早期	燃糸文系 貝殻・沈線文系	土器・石鏃の使用が始まる		
	7500年前	前期	羽状縄文系（関山式） 諸磯式 十三音提式 五領ヶ台式	気候温暖化による海水面上昇 羽根尾貝塚がつくられる	古中村湾の形成	
	5500年前	中期	勝坂式 曾利式 阿玉台式 加曾利E式	東日本で環状集落がつくられる 久野一本松遺跡の環状集落	古中村湯へ 殿窪遺跡	
	4500年前	後期	称名寺式 堀之内式 加曾利B式	祭祀道具の発達		
	3500年前	晩期	後期安行式 晩期安行式 浮線網状文系			
	2400年前					
	弥生時代	前4世紀	前期	矢頭式 堂山式 三ヶ木式 平沢式 中里式	水稲耕作の本格的な開始	
		前3世紀				
前2世紀		中期		中里遺跡の出現	絵画土器 鳥形土器	
前1世紀			宮ノ台式			
1世紀		後期	久ヶ原式 弥生町式 前野町式	朝光寺原式（相模） 千代南原遺跡や千代吉添遺跡に環濠集落が展開		
2世紀						
3世紀		前期	五領式 S字状口縁台付壘	前方後円墳の築造開始		
古墳時代	4世紀					
	5世紀	中期	和泉式 駿豆型坏		小船森遺跡 小船永福遺跡	
	1500年前	後期	鬼高式	久野古墳群の成立	羽根尾横穴墓群	
	6世紀					
古代	7世紀	飛鳥時代				
	8世紀	奈良時代		千代寺院跡の造営 師長国造によって足下、足上、余綾の郡に分割統治される		
	9世紀	平安時代				
	10世紀					
	11世紀					
	12世紀	鎌倉時代 南北朝時代 室町時代 戦国時代		1192 源頼朝が征夷大將軍に任じられる 小田原城が築城される 小田原城総構の完成 1590 豊臣秀吉の小田原攻め	中村氏居館跡 道場城山遺跡 小船森遺跡の埋蔵銭	
近世		江戸時代		1603 江戸幕府が開かれる 1707 富士山宝永の大噴火 1853 ペリー来航	小船村の記録	

第12図 関連年表

## 文 献

本書を作成するにあたり、引用または参考にした主な文献を掲載しました。小船森遺跡とその周辺の遺跡についてさらに詳しく知りたい方は、参考にしてください。

- |           |      |  |
|-----------|------|--|
| 安藤広道      | 1999 | 「弥生土器の『絵画』と文様」『古代』106                              |
| 松島義章      | 2006 | 『貝が語る縄文海進—南関東、+2℃の世界—増補版』有隣新書                      |
| 小田原市教育委員会 | 2006 | 『羽根尾遺跡群—羽根尾貝塚・羽根尾横穴墓群と周辺遺跡—』小田原の遺跡探訪シリーズ1          |
| 安藤広道      | 2009 | 「弥生時代における生産と権力とイデオロギー」国立歴史民俗博物館研究報告第152集           |
| 神奈川県教育委員会 | 2012 | 『平成23年度かながわの遺跡展・巡回展 弥生時代のかながわ—移住者たちのムラと社会の変化—』展示図録 |
| 小田原城天守閣   | 2014 | 『いにしへの小田原～遺跡から見た東西文化の交流～』小田原城天守閣特別展図録              |
| 富士山考古学研究会 | 2020 | 『富士山噴火の考古学—火山と人類の共生史—』吉川弘文館                        |
| 浅野春樹      | 2020 | 『中世考古くやきもの>ガイドブック』新泉社                              |
| 小田原市郷土文化館 | 2021 | 『小田原の歴史と民俗』小田原市郷土文化館常設展示ガイド                        |

小田原の遺跡探訪シリーズ17

### 小船森遺跡

—中村川流域に広がる遺跡—

令和4年(2022)2月17日 印刷

令和4年(2022)2月25日 発行

編 集 小田原市教育委員会

発 行 〒250-8555 小田原市荻窪300番地

電 話 0465-33-1715

URL : <https://www.city.odawara.kanagawa.jp>

E-mail : [bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp](mailto:bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp)

印 刷 有限会社 石橋印刷

